

# 中世英語に於けるフランス語の影響

—*Sir Gawain and the Green Knight* の場合—

加藤直良

英語は Norman Conquest の結果多大なるフランス語の影響を受けた。しかし、英語にフランス語の影響が生じ始めたのは、Norman Conquest が勃発した 1066 年に始まったものではなかった。英国の歴史によれば、Ethelred 王は 1002 年に Norman の Emma と結婚した。また、彼が Sweyn 王に追われた際、Normandy に難を逃れ、その結果、以前にも増して親密な関係に発展した事は明確であった。彼の息子の Edward および Alfred の両者はフランスで養育された。このような事情の下で、Edward が 1042 年国王の地位に就いた時、多勢の Normans を率い、そして彼らを政府の重要な位置に、また教会等での重責を彼らに課したのであった。少なくとも 200 年の間、政府・教会・その他多数の領域に於いて Normans は重要な地位を領有していたのであった。この結果、言語の面に於いても、英国へ侵入し、そしてその地で高位を得た Normans にとって、英語という一言語を必要上積極的に習得しようと奮起させるものは殆どなかったのである。故に、フランス語は自由に英国の上流社会で駆使されたのであった。しかし、ここで記憶にとめておかねばならぬ事実は、上流階級および立身出世のために、フランス語は必要条件の言語ではあったが、下層階級の民衆は、通常英語を使用していたのであった。

様々な過程を経、数十年後英語は再び英国でその地位を獲得した。しかしながらその英語はフランス語の要素を大量に含有した言語に変遷していた。筆者はこの論文に於いて、中世英語期の作品 *Sir Gawain and the Green Knight* に如何なるフランス語の影響が窺えるか調査考察するものである。

## I.

最も注目すべきフランス語の影響の一つとして、英語は大量の語彙をそれから輸入したことを挙げるができる。英国人が容易にフランス語を受け入れ、そして多数の語彙を彼らが躊躇することなく採用したことは実に驚嘆すべきことである。ここでの作品 *Sir Gawain and the Green Knight* にも多数のフランス語系語彙を見ることが出来る。引用文例は一例だけにとどめ、他は語彙のみ列挙する。その際ページ数および行数により個々の例文の出所を明確にした。e.g. 3. 2→'p. 3, l. 2'

### 宗 教：

*chauntré* 'singing of mass': þe chauntré of þe chapel cheued to an ende (3. 63).

*chaplajn, absolucioun, serue, pray, paradise, matynnes, croys, deuocioun, merci, þenaunce, prayere, saynt, seruyce, chapel, auter, clerk, oritore.*

### 衣服，織物：

*tars* 'silk of Tharsia': þe stif mon steppez þeron, and þe stel hondelez, dubbed in a dublet of a dere tars (16. 571).

*sendal, robe, þelure, þane, mantyle, lace, goune, dublet, bleaunt, vesture, sute, surkot.*

### 戦争，軍事：

*blasoun* 'shield': His bronde and his blasoun boþe þay token (23. 828).

*ax, baner, barbe, auentayle, armes, arsounez, polaynez, abataylment, þysan, þlate, þece, þaunce, melly, launce, hauberghe, greuez, harnays, gorger, enmy, defende, etc.*

裝飾, 宝石:

*pendauntes* 'pendants': þe pendauntes of his payttrure, þe proude  
cropure (5. 168).

*iuel, gemme, tassel, aumayl, perle, frenges, cercle, diamauntez,  
bande, bauderyk, barres, appparayl, vrysoun, toreted.*

家庭生活:

*cheyer* 'chair'; *chemné* 'fireplace': A cheyer byfore þe chemné,  
þer charcole brenned (25. 875).

*chambre, tabil, salure, sanap, rudelez, mes, laumpe, couertour,  
cortyn, closet, whyssynes, chamberlayn.*

建 物:

*towre* 'turret': Towres telled bytwene (22. 795).  
*garytez, mote, pynakle, fyllyolez, bastel, coprounes.*

身 分:

*prynces* 'princess': For þat prynces of pris depresed hym so  
þikke (49. 1770).

*prynce, syre, ryal, souerayn, duches, cheualdry, nobelay, cortaysy,  
court.*

狩 獵:

*braches* 'hounds': Braches bayed þerfore and breme noyse maked  
(32. 1142).

*trystor, stablye, fute, cropure, chace, querré, quest, prys, chasyng,  
brawen, best, venysoun.*

芸術, 学問:

*papure* 'paper': þat pared out of papure purely hit semed  
(23. 802).

*maystrés, mynstralsye, lettrure, letteres, laye, art, clergye,  
romaunce, stori.*

食事, 御馳走:

*diner* 'dinner': Bi þat þe diner watz done and þe dere vp  
(26. 928).

*spyces, soþer, sostnaunce, morsel, hastlettez.*

娯 楽:

*daunsyng* 'dancing': Dere dyn vpon day, daunsyng on nyȝtes  
(2. 47).

*carole, resayt, plesaunce, tournaye, solace, disport, iuste, note.*

文 明:

*pore, pouer* 'poor': And pyne yow with so pouer a mon, as play  
wyth your knyȝt (43. 1538).

*pes, seruauant, nobele, vylany, vilanous, study.*

その他:

*prysoun, surfet, tytel, meschef, nye, etc.*

多岐に亙ってフランス語系の語彙を挙げることが出来たが、果してこれらの語彙はいつ頃英語に移入してきたのであろうか。Mossé, Jespersen, Baughらがこの問題に関し詳述している。筆者はここで Jespersen が明確にした結果を採用してやることにする。Jespersen はフランス語から入ってきた 1000 語に関し、統計学的な研究を試みた。彼の明らかにした統計表によると、Norman Conquest 以降 100 年間に於いて、英語に入ってきたフランス語語彙は数の上では著しい増加は見られないにしても、1251 年より 1400 年に亙って最も大量のフランス語語彙の輸入があったことを示している<sup>(1)</sup>。

この様に、外国語の輸入により、英語は混交の語彙を持つ言語であるという確固たる特徴を保持することになったのである。ここで、*Sir Gawain and the Green Knight* に於いて、OE 系の語彙とフランス語系の語彙とが混用されている例を挙げることにする。イタリック体の単語は総べてフランス語系のものである。

'What, is þis Arþures hous,' quop þe haþel þenne,  
 'þat al þe rous rennes of þur3 *ryalmes* so mony?  
 Where is now your *sourquydrye* and your *conquestes*,  
 Your gryndellayk and your greme, and your grete wordes?  
 Now is þe *reuel* and þe *renoun* of þe *Rounde Table*  
 Ouerwalt wyth a worde of on wy3es speche,  
 For al dares for drede withoute dynt schewed!'

(9. 309-315)

## II.

英語では通常、限定形容詞は名詞の前に置かれる。この語順に加え、フランス語には、「名詞+限定形容詞」という語順がある。フランス語のこのような語順の自由奔放さに影響され、中世英語にはこの語順が見られるのである。*Sir Gawain and the Green Knight* もこの影響下にあったことを示す痕跡を垣間見ることが可能である。

Such glaum ande *gle glorious* to here (2. 46).  
 So bisied him his 3onge blod and his *brayn wylde* (3. 89).  
 On þe most on þe molde on *mesure hyghe* (5. 137).  
 þat were richely rayled in his *aray clene* (5. 163).  
 þer mony *bellez ful bry3t* of brende golde rungen (6. 195).  
 In a swoghe sylence þur3 þe *sale riche* (7. 243).  
 I schal gif hym of my gyft þys *giserne ryche* (9. 288).  
 And þou hatz redily rehersed, bi *resoun ful trwe* (11. 392).  
 I wolde com to your counseyl bifore your *cort ryche* (10. 347).  
 As þou deles me to-day bifore þis *douþe ryche* (12. 397).  
*Knyztez ful cortays* and comlych ladies (16. 539).

### III.

大量のフランス語語彙が英語に輸入され、その結果として、両語彙間で混種語が形成されるに至った。中世英語以来英語はフランス語は勿論の事、他の外国語からも語彙を多数借用し、然も、それらの語彙と英語は極めて自然に同化したため混種語が形成されたのである。この作品中では、ただ一例のみ混種語を確認することが出来た。

Morgne þe *goddess*  
þerfore hit is hir name (67. 2452)  
(*goddess* OE *god* + OFr *-esse*.)

### IV.

Norman Conquest の後、中世英語に浸透していったフランス語のスペリングの影響は非常に顕著に見られる。古代英語に於いて、写字生たちは当時の伝統的スペリングを忠実に保持していたのではあったが、中世英語、殊に、Central ME (A.D. 1250-1400) になると、明らかに古代英語期の伝統的スペリングは、次第に崩壊しつつあった。Normans は、必然的に、彼らの言語を基礎にして、新しいスペリングを確立していったのである。なお、例の語彙は、行数のみで示す。

A.  $u+n, (m, v, w) \rightarrow o+n, (m, v, w)$

*cuman*→*comen* (347, 556, etc.); *guma*→*gome* (151, 178, etc.);  
*mun*→*mon* (1811, 2354); *munuc*→*monk* (2108); *runnr*→*ronez*  
(1466); *tunge*→*tonge* (32); *wundor*→*wonder* (238, 2459, etc.);  
*wunian*→*wone* (257, 814)

B. y→u

*blyscan*→*blusche* (650, 793, etc.); *byrde*→*burde* (613, etc.); *gebyrd*→*burþe* (922); *bysigian*→*busy* (1066); *bysignes*→*busynes* (1986, 1840); *dyhtig*→*duzty* (724); *fyst*→*fust* (391); *lyre*→*lur* (355, 1284, etc.); *mycel*→*much* (182, 2336, etc.); *mylen*→*mulne* (2203); *ryccan*→*ruch(ch)e* (303, 367); *styrán*→*sture* (331)

C. u→ou

*abutan*→*aboutte* (75, 217, etc.); *bur*→*boure* (853); *brun*→*broun* (618, 879); *cup-lice*→*couþly* (937); *dun*→*dounez* (695, 1972); *ful*→*foule* (717, 1329, etc.); *hus*→*hous* (285, etc.); *lucan*→*louke* (2007, etc.); *mup*→*mouþ* (1572, 1446, etc.); *ute*→*oute* (1511); *runian*→*roun* (362); *tun*→*toun* (31, 614, etc.)

D. cw→qu

*cwellan*→*quelle* (752, etc.); *cweme*→*queme* (2109, 578); *cwen*→*quene* (339, 469, etc.); *cwicu*→*quik* (2109, 177)

E. c before the front vowels (i, e)→k

*cene*, *cenlice*→*kene*, *kenly* (321, 1048, etc.); *cennan*→*kenne* (1484); *cepan*→*kepe* (1059, 2148, etc.); *cynd*→*kynde* (473); *cyning*→*kyng* (37, 364, etc.); *cyrf*→*kyrf* (372); *cyrtel*→*kyrtel* (1831); *cyssan*→*kysse* (605, 974, etc.)

F. c[tʃ]→ch

*cerran*→*charre* (1143, 850, etc.); *cerr*→*charres* (1674); *ceap*→*chepe* (1940, 1941, etc.); *ceapian*→*chepen* (1271); *cild*→*chylde* (647, 280); *cinn*→*chynne* (958, 1204); *ceosan*→*chose* (863, 1271, etc.); *secan*→*sech* (266, etc.); *ræcan*→*reche* (66, 1804, etc.); *spræc*→*speche* (314, etc.)

G. sc→sch, ssh, sh

*scaeft*→*schafte* (1458, 2372, etc.); *scaga*→*schaze* (2161); *sceal*→

*schal* (31, 288, etc.); *scealc*→*schalk* (160, 424, etc.); *scamu*→*schame* (317, 2504, etc.); *scanca*→*schankes* (431, etc.); *sceþpan*→*schape* (1626, etc.); *scearp*→*scharp* (213, etc.); *sceran*→*schere* (213, 1337); *scildan*→*schylde*(1776); *scir*→*schyre*(317, 506, etc.); *flæsc*→*flesche* (943, etc.); *fisc*→*fische* (503, 890)

H. þ, ð→th

*mub*→*muthe*(447, 1572, etc.); *forþ*→*forth*(66, 428, etc.); *æbele*→*athel* (5); *deap*→*dethe* (1600); *duguþ*→*douth* (6, 1365, etc.); *fyrhþ*→*fryth* (695, etc.); *hundrað*→*hundreth* (743, 1144, etc.); *wraþ*→*wroth* (319, etc.)

## V.

Dative infinitive (Inflected infinitive) は、屈折語尾が確立していた古代英語では、*-enne* という語尾を保持していた。古代英語に於いて、Dative infinitive は *to* に導かれ、目的を表わしていた。しかし、中世英語で屈折語尾組織が崩壊し、この語尾 *-enne* も消失し、意味も目的を表わさなくなった。それ故に、フランス語の *pour* の用法を模倣し、*for* を用いて目的の意味を表現したのである。

*For to sette þe sylueren þat sere sewes halden on clothe* (4. 124).  
*For to haf wonnen hym to waze* (43. 1550).  
*And let lodly þerat þe lorde for to here* (45. 1634).

## VI.

フランス語の影響を鋭敏に受けたものの一つに詩の領域がある。古代英語で

は、頭韻の韻文のみが常用されていたが、Norman Conquest 後、当時 Anglo-Norman 文学の殆ど総べてが脚韻の詩であったという事実に基づき、英語もこの脚韻の新技法を即座に導入したのであった。このため、伝統的な頭韻法と、脚韻の新技法とが混用されている詩が見られるのである。Sir Gawain and the Green Knight 中にも、頭韻と共に脚韻を用いた例は多々ある。

As hit is stad and *stoken*  
 In stori stif and *stronge*,  
 With lel letteres *loken*,  
 In londe so hatz ben *longe*. (2. 33-36)

He wex as wroth as *wynde*,  
 So did alle þat þer *were*.  
 þe kyng as kene bi *kynde*  
 þen stod þat stif mon *nerre*, (10. 319-322)

英語が変遷してきたその要因の一つに、多大なる外国語の影響があった事は、否めない事実である。中世英語に於いては、外国語の中で殊に重要なのはフランス語である。Norman Conquest 後、英国の支配階級を構成した Normans は文化的、軍事的、政治的、その他あらゆる分野に於いて、土着民より進歩していた。それ故、広範囲に互った語彙が借入されたのである。大量の語彙借入により、古代英語期では相当に発展していた Anglo-Saxons の学問は次第に衰滅していき、古代英語の文学語が消滅するという結果になった。逆に、語彙に及ぼしたフランス語の影響は、今日に至るまで、その痕跡を残す結果になったのである。

文学語の消滅に伴い、古代英語では表現可能であった相当高級な学問上の観念や思考等の表現手段が消失した。そのため、学問や芸術等を志す者、また立身出世を希望する者はフランス語を学ぶ必要性があったのである。しかし、形

勢が逆転し、長期間下層階級の言葉となっていた英語がイギリスの言語として再び勢力を拡大した時、フランス語では表現され得た相当高級な概念や思考を明確に表現するだけの手段を英語は保持していなかったのである。その時、英語は抵抗もなく、フランス語の表現手段を取り入れたのであった。

古代英語では頭韻の韻文しか存在しなかったが、Normans の英国征服後、彼らは、新しい詩の技法、いわゆる脚韻の新技法を持ち込んだのであった。当時、Anglo-Norman 文学は、総べてが脚韻の詩であったことを推察すれば、その技法が英語に移入されたことも納得のいく事である。英国人は、Normans よりこの新技法を採用したのであった。*Sir Gawain and the Green Knight* には、これら両技法が混用されている。

〔註〕

(1)	Before 1050	2	1451 — 1500	76
	1051 — 1100	2	1501 — 1550	84
	1101 — 1150	1	1551 — 1600	91
	1151 — 1200	15	1601 — 1650	69
	1201 — 1250	64	1651 — 1700	34
	1251 — 1300	127	1701 — 1750	24
	1301 — 1350	120	1751 — 1800	16
	1351 — 1400	180	1801 — 1850	23
	1401 — 1450	70	1851 — 1900	2
				1000

Jespersen 1938, p. 87.

〔略語表〕

ME	Middle English
OE	Old English
OFr	Old French

〔参考文献〕

Baugh, A. C. *A History of the English Language*. Second edition. London: Routledge & Kegan Paul, 1959.

- Jespersen, Otto *Growth and Structure of the English Language*. Ninth edition. Stuttgart: Teubner, 1938 (rep. Oxford: Blackwell, 1972).
- Lounsbury, T. R. *A Historical Outline of the English Language*. Edited with notes by Takanobu Otsuka. Osaka: Osaka Kyoiku Tosho, 1973.
- Sakuraba Ichiro *Eigoshi-gaiyo* ('A short history of English'). Tokyo: Shinozaki-Shorin, 1973.
- Serjeantson, M. S. *A History of Foreign Words in English*. London: Routledge & Kegan Paul, 1935.
- Tolkien, J. R. R. and Gordon, E. V. (eds.) *Sir Gawain and the Green Knight*. Second edition, revised by Norman Davies. Oxford: Clarendon Press, 1967.